



丹野浩之さん・千春さん夫妻 自宅前茶園にて

第65回全国茶品評会普通煎茶10^{キロ}の部 1等2席・農林水産大臣賞受賞

丹野浩之の 使命

丹野園（水川）

チーム川根本町の快挙

平成15年の初受賞以来、2度目の農林水産大臣賞。「うれし」と同時に、とても驚いている」というのが正直なところ。まさか2度目があるとは思っていませんでした。今回に限らず、全国茶品評会の出品には多くの時間と労力が必要になります。特に個人農家では困難なことも多い。摘採を短期間で終えるという離れ業は、個人では不可能に近いと思います。

今年の摘採には、2日間で100人、その後の工程も含め、のべ140人もの人が協

います。

力してくれました。県や町の関係課の皆さんをはじめ、JAのおおいがわの皆さん、摘採などにご協力いただいた町民の皆さん：言ってみれば「チーム川根本町」が丸となつて勝ち取った農林水産大臣賞だと思っています。私も産地賞に貢献できたことを非常にうれしく思っています。

さまざまな要因がうまく具合に重なり合いました。摘採日の天候や新芽の生育状況。うまく摘むことができた。全く採むことができた。全てのタイミングが合い、100%ではなく120%の状態を生み出すことができたんだと思

全品に出品する茶農家の畑はみんな素晴らしものです。それぞれ情熱を注ぎ、努力して茶作りをしている人ばかり

そんな中で、本町から最高賞の農林水産大臣賞を出すことができた。これはとても大きなことです。努力すれば、上位入賞はできるかもしれない。でもその中でも、抜き出るものがないと大臣賞には結びつかないですね。その差は、ほんのちよつとかもしれませんが、明確な差でもあるんです。それが100%プラスアルファの部分。神がかり的な部分と言えるかもしれません。

祖父、父が果たせなかった

夢を自分がつかむことができた。旧水川農事研究会時代を含め、この地域は優秀な茶農家を排出してきました。その偉大な先輩たちに肩を並べたとは言えませんが、それでも一つの形にはなつた気がしています。

かゆいところに手が届く

これまで私は「お茶は生き物である」という思いで茶作りをしてきました。モットーは「かゆいところに手が届く茶作り」。茶は声を出すことができませんから、私自身が気付いてあげる必要があります。お茶は今、何をしたら喜ぶのか、どうして欲しいのかを常に考えています。だから1年中、休みなんてありません。良い新芽は人間でいう元気な赤ちゃん。そんな気持ちで常に持ち続けて、茶と向き合っています。

川根茶産地のこれから

風評被害の影響も色濃く残る川根茶産地。これから未来を考えたとき、1グラムでも多く「川根茶」が消費者の元に届く努力をしていかないといいけません。今年のお茶は放射能という問題が出てしまいましたが、出来だけを考えた

例年以上においしいお茶ができました。まずは地元の方々に飲んでほしいと思います。贈答などにも積極的に使ってほしいですね。そうやって、停滞ムードが広がる川根茶産地を、少しでも活気づけていきたいらと思います。

川根茶は、再び「産地賞・農林水産大臣賞」という日本一の称号を得ることができました。そのこと自体も一つの目標ではありますが、でも最終的には、「川根茶はいつも在庫が足りない」と言われるくらい売れることが一番の目標なんです。

これからの時代、農家だけではなく、行政、農協などの団体や町の皆さん、商工業、観光業など他分野の人たちとも連携して、川根茶産地を盛り上げていく方法を模索する必要があります。

私は49歳。茶業界ではまだまだ若造の部類です。今回の受賞におごることなく、先輩たちの思いを受け継ぎ、この地域の伝統を守り、より良い川根茶を作ることに情熱を注いでいきたい。川根茶産地の未来を考えたい。

それが、私たち茶農家にできる「最大の使命」だと思います。